

活用できるピアノ奏法

～コードネームを用いたピアノ演奏法の実践と考察～

井本英子

IMOTO Hideko

保育者養成校における「音楽」の授業で学生が習得することが望まれる様々な項目の中にピアノ奏がある。本学ではピアノ実技を通してピアノ演奏の基礎技術を習得し、その技能を高めることにより保育・幼児教育の現場に即応実践力を養い高めることを目標としている。ピアノ演奏技術の習得においては既成の楽曲を弾く演奏技能を高めるだけではなく、弾き歌い、伴奏法、連弾奏、即興演奏等多様な手法を学ぶことで「活用できるピアノ奏法」が身につく保育の現場での実践力となる。音楽専門家教育ではない部分でこそ多様な演奏手法を習得することでピアノ演奏の面白さを知り積極的に演奏する機会が増えてより音楽の楽しさを味わうこととなると考える。本稿ではピアノ奏におけるコード奏（伴奏部分はコードネームを標として自分で和音を付けて演奏する）に着目しその習得の実践からコード奏の指導内容を考察する。

キーワード：活用できるピアノ奏法、コード奏、コードネーム

1. はじめに

ピアノ演奏といえば一般にクラシック音楽ではピアノ譜に記されている完成された楽譜を読譜して弾くと認識されている。ピアノ独奏であったり、他の楽器や声楽の伴奏であったり、様々なスタイルのアンサンブルであったりとその種類は多様である。主に大譜表¹上に作曲者が指定して音やリズムをはじめとする多量の情報を記された楽譜をピアノ音で再生するということになる。楽譜を介さない演奏としては、演奏者自身の創作による楽曲演奏がある。この場合作曲者の記録として楽譜があってもそれは二次的な役割である。その他にメロディーやコードネーム等部分的な決まり事を基にした演奏や即興演奏がある。ジャズやポピュ

ラー音楽ではこれが主流である。

このコードネームを使った伴奏法が習得できると大譜表の読譜の負担から開放される。メロディーを歌うことができればコードネームの表記から和音の種類を特定してメロディー部分と和声が奏でられる。これにより音楽の全体像を容易に捉えることができる。また、音楽の雰囲気や用途、自分の演奏技量に合わせた演奏を自由自在に展開することができる。保育の現場において保育者がピアノを奏でると保育者のピアノに合わせて子どもたちが活動することになりがちである。コード演奏法が習得できると楽譜にとらわれない自由な演奏ができるので子どもたちの様子や活動に即応したピアノ演奏でより情感豊かな表現活動を体感することができる。

本学では「保育内容・音楽表現Ⅰ」の授業で幼

稚園での実践で活用できるピアノ奏法のひとつとして「コードネームとコード奏」の項目を履修。コードネームの知識と活用法を学ぶが他の学習項目との時間的拘束から基礎的な部分に終始しているのが現状である。コードネームを覚えてコードを弾くというだけでは活用の範囲が限られる。筆者にとっては高度なコード奏の技能を効率よく確実に習得する教材、授業展開が課題となっている。

そこで本稿では保育者養成校に於いて学生たちがコードネームを覚えて、楽譜からではなくコードネームから自在に伴奏を付けて「活用できるピアノ奏法」を習得するための実践方法を振り返り考察する。

2. 方法

調査期間：2017年5月～2018年1月

調査対象：保育職志望の短期大学1、2回生 子ども学ゼミA（音楽）受講生15名 ピアノ初心者²の学生から子どもの頃から続けてピアノレッスンに通っている学生、吹奏楽経験者等ゼミ生選択において音楽経験の有無は問わない。授業形態は単位認定（2単位）必修の通年科目。

3. 授業展開

子ども学ゼミAのシラバスより授業テーマ及び到達目標、授業概要、全体の授業計画・内容を記す。

授業テーマ及び到達目標

保育・教育現場での様々な音楽の手法について学び、保育・教育現場で音楽活動を実践していくための技術と技能を身に付ける。

授業の概要

演習。各人の技術向上及びグループワーク。課題は1回完結ではなく継続して積み重ねて学習する。課題の予習・復習と積極的な参加が受講条件。

全体の授業計画・内容

1. オリエンテーション
2. ゼミ訪問
3. ゼミ選択
4. 基本リズム1（2、4拍子）
5. 基本リズム2（3、6拍子）
6. 応用リズム
7. 歌唱1（斉唱、合唱）
8. 歌唱2（弾き歌い）
9. コード奏法基本1（コードネーム）
10. コード奏法基本2（メジャー・マイナーコード）
11. コード奏法基本3（7th.コード）
12. キーボードアンサンブル1（個人練習）
13. キーボードアンサンブル2（パート練習）
14. キーボードアンサンブル3（合わせ練習）
15. キーボードアンサンブル4（発表）
16. ピアノ奏1（右手の練習曲）
17. ピアノ奏2（左手の練習曲）
18. ピアノ奏3（楽曲ソロ演奏）
19. ピアノ奏4（連弾）
20. ピアノ奏5（コード奏）
21. ピアノ奏6（発表）
22. リズムあそび
23. うたあそび
24. 楽器あそび
25. 楽器アンサンブル1（奏法）
26. 楽器アンサンブル2（パート練習）
27. 楽器アンサンブル3（合わせ練習）
28. 楽器アンサンブル4（指導法）
29. 楽器アンサンブル5（発表）
30. まとめと振り返り

授業計画・内容では9.10.11.20.でコード奏学習となっているが授業概要で述べているように各課題は1回完結ではないので複数の内容を継続して学習している。

次にコード奏に関する学習展開を記す。コードネームは和音の略記法で和音のルート

(根音、ベース) 音名を英語で示し数字等、他の表記と合わせて和音の種類を特定する。そこでまず「ドレミファソラシ」を英語読みで「CDEFGAB」に置き換える。これは理解するだけでは十分ではない。音と英語での音名が合致しルート音がすぐにわからなければ他の表記と合わせて和音に変換するに至らない。学生に限らず一般に「ドレミファソラシ」が「CDEFGAB」であることは、すぐに納得できることである。また音楽経験豊富な指導者からすればこの変換はとても容易いことである。それ故指導者は安易に次のステップへ進み各種コードを教えてしまう。しかしそれでは結局理論上では理解できても演奏することに結びついていかない。音名を英語音名に即時変換できることから始める。

3-1 「C・D・E・F・G・A・B」

「ドレミファソラシ」の英語読みを覚える。

①音名模唱

例えば指導者が「CDE」と歌うと「CDE」とまねして歌う。慣れると指導者が「ドレミ」と歌い「CDE」で歌う。

②音名暗唱

階名唱できる歌を英語音名で歌う。

Ex.「ソミミ ファレレ ドレミファソソソ」
→「GEE FDD CDEFGGG」

③手の動きを使った音名唱

各音の高さの違いを手の高さやジェスチャーなどで示しながら動きを伴って楽しく歌う。

④音名を使ったゲーム

グループでリズムに乗って音名を英語音名に変換して言い合う。音の数を変えたり、リズムを変えたり、グループの人数を変えたりしながら楽しく覚える。

3-2 音名と鍵盤の一致

記された音名(CDE…)を見て鍵盤で弾く。

①白鍵7音のみ

C D E F G A B

②黒鍵5音、10種類

C# D♭ D# E♭

F# G♭ G# A♭ A# B♭

③全ての音名 12音21種類

C D E F G A B

C# D# E# F# G# A# B#

C♭ D♭ E♭ F♭ G♭ A♭ B♭

④ドリル〔C1-1〕を使って早く確実に変換できるように学習。右手・左手ともに練習。

〔C1-1〕

1 C	2 G	3 F	4 D
5 A	6 B	7 G	8 E
9 D	10 C	11 B	12 F
13 E	14 A	15 D	16 G
17 B	18 E	19 F	20 A

⑤〔C1-1〕が確実にできることを確認できたら〔C1-3〕へ進む。

〔C1-3〕

1 C#	2 F#	3 G#	4 A♭
5 B♭	6 D♭	7 E♭	8 G♭
9 A#	10 D#	11 F#	12 B♭
13 E♭	14 C#	15 G♭	16 D♭
17 C♭	18 B#	19 E#	20 F♭

3-3 和音(コード)の構成

major triad (長三和音) と minor triad (短

三和音)の構成について学習。和音構成の考え方、音程の数え方等からコード学習のための必要最低限の理論を五線と鍵盤を使って理解する。

3-4 major triad

①major triadのコードを覚える。基本形のみ。
3-3の学習よりmajor triadが長3度と短3度の構成であることを理解しているので楽譜を見てコードを覚えるのではなくルート音から自分でmajor triadを探す。まずは白鍵7音をルートにしたコードを五線上でも鍵盤上でも作れるように練習。

②コードを覚えるための鍵盤奏の場合、左手はルート音を任意の指で弾く。右手は和音を弾く。基本形は1, 3, 5の指使いを基準として弾く。調性には関係なく楽譜を見ずに鍵盤を見て「CDEFGAB」の順に弾く。(譜例-1) 単調な練習にならないように指導者は8ビートやラテンなど多様なリズムで伴奏する。

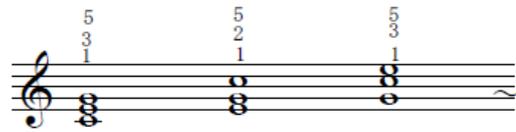
(譜例-1)



③「コードネーム速読変換ドリル」として[C1-1]を弾く。左手はルート音、右手で和音の両手奏。20番までのコードを正しくできるだけ早く弾く。20番まで弾き終えるタイムを計って記録することで自己の目標を明確にする。計測は90秒までとし20番に達しない場合は何番までできたかを記す。

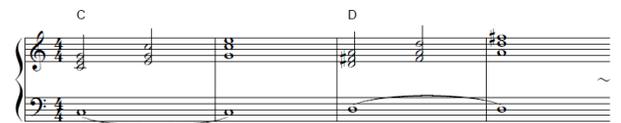
④和音の転回形を学習。右手の和音を基本形から第1転回形、第2転回形と転回させて弾く。どの場合も左手はルート音を弾く。右手第1転回形は1, 2, 5、第2転回形は1, 3, 5の指使い(譜例-2)を標準とする。

(譜例-2)



和音の転回は難易度が高い。各自の判断で基本形から第1転回形ができれば第2転回形に進む。左手のルート音はオクターブ奏にしたり色々なリズムを付けたりして弾いてもよい(譜例-3)。

(譜例-3)



転回形をスムーズにすすめるために言葉でも練習。

Ex. 「C」⇒「ドミソ・ミソド・ソドミ」

「F」⇒「ファラド・ラドファ・ドファラ」

ドリル[C1-1]を各転回形で③と同様に弾く。

④黒鍵をルート音にした5音も白鍵同様に習得。ドリル[C1-3]を③と同様に弾く。習熟した学生は各転回形に進む。白鍵よりも難易度が増す。

⑤全てのmajor triadの含まれる課題ドリル[C2-1]に取り組む。

[C2-1]

1	2	3	4
F	A	D	D \flat
5	6	7	8
E	E \flat	G	G \flat
9	10	11	12
C	B	B \flat	F
13	14	15	16
F \sharp	G	A \flat	E \flat

17	18	19	20
D♭	C♯	A♭	B♭

3-5 minor triad

① minor triad のコードの基本形を覚える。
major triad と同様に 3-4 ①~④の順に学習
を重ねる。③のドリルは〔C1-2〕を使う。

〔C1-2〕

1	2	3	4
Cm	Dm	Em	Am
5	6	7	8
Fm	Gm	Em	Bm
9	10	11	12
Am	Dm	Gm	Fm
13	14	15	16
Cm	Bm	Dm	Gm
17	18	19	20
Am	Em	Fm	Bm

また、④の黒鍵がルート音になるコードは習熟した学生のみ学習。

⑤全ての minor triad の含まれる課題ドリル〔C2-2〕に取り組む。

〔C2-2〕

1	2	3	4
Fm	F♯m	Dm	Bm
5	6	7	8
B♭m	Em	E♭m	C♯m
9	10	11	12
Am	A♭m	Gm	G♯m
13	14	15	16
Cm	F♯m	G♯m	C♯m
17	18	19	20
B♭m	A♭m	E♭m	Bm

3-6 major triad と minor triad

授業では必ず毎回 3-4 ②④と 3-5 ②④を

弾く。また鍵盤に沿って major triad - minor triad - major triad と弾く練習 (譜例-4) を加える。

(譜例-4)



3-7 コードネーム付きメロディー譜 (1)

メロディーとコードネームが記された楽譜からの奏法を学ぶ。

①『空も飛べるはず』(作詞・作曲 草野正宗)
日本のバンド、スピッツの楽曲を弾き歌い課題として学習。学生が歌いやすいポピュラー曲から一部抜粋して課題とした。(譜例-5)。歌詞で歌いながら各自がコードネームをもとに任意の伴奏をつけて練習、発表。夏休みの課題で練習の時間が十分にあったのでよい演奏がたくさんあった。学生たちは楽譜に囚われない分、伸びやかな歌声で歌っていた。また各々工夫して、全員が異なる伴奏形での演奏であったので学生同士感心したり刺激を受けたりした様子であった。

(譜例-5)

空も飛べるはず

作詞・作曲 草野正宗

②『わらの中の七面鳥』（アメリカ民謡）

アンサンブルに発展する課題として学習。（譜例—6）ハ長調で主要三和音の3コード（C,F,G）で演奏できる課題。分数コード³（ここではコードの転回形の指示方法として）を学習。

（譜例—6）

わらの中の七面鳥 アメリカ民謡

3-8 dominant 7th.

① dominant 7th.のコードを覚える。機能と声の中での属七としての役割等ここでも理論は必要最低限のみ学習。五線上と鍵盤で確認するが前述のコードと同様、楽譜を弾くのではなく major triad に短3度を積んで自分で探して弾けるように指導。

② 鍵盤奏ではまず major triad - dominant 7th. で練習。

（譜例—7）

その後自分の進度に合わせて転回形に進む。dominant 7th. は四和音であるので第3転回形までである。

（譜例—8）

③ ドリル [C4-1] (ルート音白鍵のみ) で練習。基本形から始めて各自の進度に応じて転回形に進む。また [C4-2] (白鍵のルート音と頻出の黒鍵ルート音) も練習。

[C4-1]

1	2	3	4
G 7	C 7	D 7	F 7
5	6	7	8
E 7	B 7	A 7	F 7
9	10	11	12
C 7	E 7	G 7	D 7
13	14	15	16
A 7	B 7	F 7	A 7
17	18	19	20
C 7	D 7	G 7	E 7

[C4-2]

1	2	3	4
C 7	D 7	D \flat 7	B 7
5	6	7	8
B \flat 7	E \flat 7	G 7	G \flat 7
9	10	11	12
F \sharp 7	F 7	A \flat 7	B \flat 7
13	14	15	16
D \flat 7	C 7	C \sharp 7	E 7
17	18	19	20
F \sharp 7	A 7	E \flat 7	A \flat 7

④ 3-7 ②『わらの中の七面鳥』で G7 を使う。またリハモナイズ (別のコードを付ける) を経験し和音による音色の違いを感じ和音の果たす役割を学ぶ。

⑤『わらの中の七面鳥』を2人1組で相談しあって連弾曲にアレンジして発表。メロディーが弾けてコード奏ができるると簡単に連弾で楽しむことができると学生たちに実感してもらうことがねらいであるので30分程度の練習で発表する。

3-9 コードネーム付きメロディー譜 (2)

①『サンタが町にやって来る』(作詞 H.Gillespie 作曲 J.F.Coots)

3部形式(A-A-B-A)。ハ長調のメロディーとコード(C,F,G,G7,Dm,Am)だが他調の和音(Fm,C7,D7)も出てくる楽譜(譜例-9)をもとに演奏。ソロ演奏曲、2人4手連弾曲、3人5手連弾曲として各グループでアレンジを考えて演奏、発表。コード奏での伴奏付けというだけでなく前奏や後奏をはじめ、曲の構成、リズムスタイル、またリハモナイズやメロディーフェイク⁴等アレンジに工夫を凝らしたオリジナリティーあふれた作品となった。(詳細後述)

(譜例-9)

サンタが町にやって来る
作曲: J.F. Coots

The score consists of eight staves of music in treble clef, 4/4 time. Chord names are written above the notes. The chords used are C, C7, F, Fm, C, G7, Dm, Am, G, D7, and Cm.

②『風の丘 (魔女の宅急便より)』(作曲 久石 譲)

イ短調のメロディーとコード(Am, Em, Dm, E7, C, F, G7, A7)の楽譜(譜例-10)を使用。

両手伴奏での弾き歌いで発表。構成はa-a'-b-cの18小節の短いものだが学生たちの演奏は一つの伴奏の形に留まらず工夫を重ねていた。間奏をつけて2コーラス分の演奏にまとめた学生もいた。

(譜例-10)

風の丘
『魔女の宅急便』より
作曲 久石 譲

The score consists of six staves of music in treble clef, 4/4 time. Chord names are written above the notes. The chords used are Am, Em, F, C, Dm, G7, C, E7, Am, A7, Dm, Em, Am, Dm, Em, F, C, Dm, G7, Em, Am, D7, Dm, E7, and Am.

3-10 minor 7th.

① minor 7thのコードを覚える。五線上と鍵盤で確認するが前述のコードと同様、楽譜を弾くのではなく minor triad に短3度を積んで自分で探して弾けるように指導。3-9②『風の丘』を使って minor triad と minor 7th.の響きの違いを感じ使い方を理解する。

②鍵盤奏では minor triad - minor 7th.で練習。転回形はせず基本形のみ練習。転回形はもちろん存在するが実践に結びつく転回形の用い方は少々複雑なため基本形のみとした。

(譜例-11)

The score shows four chords in piano: Cm, Cm7, Dm, and Dm7. The chords are written in treble and bass clefs.

③ [C5-1] (ルート音白鍵のみ)で練習。基本形から始めて各自の進度に応じて転回形、或

いは〔C5-2〕（白鍵のルート音と頻出の黒鍵ルート音）も練習。

〔C5-1〕

1 Cm7	2 Dm7	3 Gm7	4 Em7
5 Fm7	6 Am7	7 Bm7	8 Em7
9 Cm7	10 Fm7	11 Dm7	12 Am7
13 Gm7	14 Bm7	15 Fm7	16 Em7
17 Cm7	18 Am7	19 Gm7	20 Bm7

〔C5-2〕

1 Cm7	2 Fm7	3 Dm7	4 Bm7
5 Am7	6 Em7	7 Gm7	8 Fm7
9 F#m7	10 C#m7	11 G#m7	12 Abm7
13 Bm7	14 Bbm7	15 Ebm7	16 Em7
17 Cm7	18 Am7	19 F#m7	20 Fm7

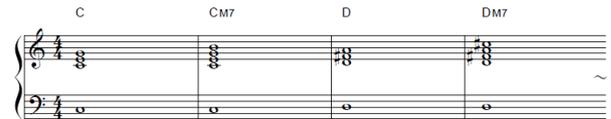
3-11 major 7th.

①major 7th.のコードを覚える。五線上と鍵盤で確認するが前述のコードと同様、楽譜を弾くのではなく major triad に長3度を積んで自分で探して弾けるように指導。dominant 7th.と minor 7th.と major 7th.の和音の積み重なり方の違いを確認。さらに minor major 7th.も解説。4種類の7th.を整理して覚える。4種類となると随分複雑なように思われるが核となる major triad と minor triad がしっかり整理しておぼえられているので比較対象ができて合点しやすい。

なお、minor major 7th.のコードは頻出が限られており今後出てきた場合構成音が理解できていれば対応できると考える。

②鍵盤奏では major triad - major 7th.で練習。3-10②minor 7th.と同じ理由で転回形はせず基本形のみ練習。

（譜例-12）



③ドリルとしての練習はしない。学生が保育現場で演奏する曲の中では major 7th.の頻出度は少ない。また新しい曲で多用されるものであっても基本形で対応できるものが多いと考える。

3-12 まとめ

学習したコードが全て含まれた課題に取り組み自分の不得意なコードを知り今後の学習に活かすようにする。

〔C7-1〕⁵ はルートが白鍵の課題、〔C7-2〕はルートに黒鍵も混じった課題である。

〔C7-1〕

1 G	2 D	3 F	4 E
5 Em	6 Cm	7 Am	8 Bm
9 C7	10 D7	11 G7	12 A7
13 Dm7	14 Fm7	15 Am7	16 Cm7
17 G△7	18 E△7	19 B△7	20 F△7

〔C7-2〕

1 Db	2 Fm	3 Bb	4 C#m
---------	---------	---------	----------

5	6	7	8
A \flat 7	E \flat 7	E \flat m7	Bm7
9	10	11	12
F \sharp m7	B	G \flat 7	C Δ 7
13	14	15	16
B \flat m7	E7	Gm7	Em7
17	18	19	20
D Δ 7	F \sharp	B \flat 7	G \flat

4. 結果

コード奏を学んだ結果として『空も飛べるはず』『わらの中の七面鳥』『サンタが町にやって来る』『風の丘』『ゆびのうた（作者不詳）』『おはなしゆびさん（香山美子作詞、湯山昭作曲）』『みんながおはなし（おうちやすゆき作詞、福福田保子作曲）』で実践した。その中で授業展開の3-9コードネーム付きメロディー譜（2）①『サンタが町にやって来る』の演奏発表を振り返る。

(1) ソロピアノ 学生A

ソロピアノでのアレンジ。スローテンポでバラード調に演奏。**Intro.**は作らず**A**から始まる。楽譜のC、Fのコードの部分をもCM7、FM7にAm、DmをAm7、Dm7にする。より柔らかな印象にするためにC7-Fの進行は削除。

（譜例—13）⁶



Bは**A**と同じコード進行を使ってメロディを少しフェイク。フレーズの終わりでは major 7th.の響きを生かしたアルペジオ奏を使う。

Cは右手オクターブ奏を使い、広がりを感じさせる。

（譜例—14）



短い**Ending**をつける。

CM7-Cm7-F-CM7の進行で閉じる。（譜例の中の**D-6**は**D**の6小節目を指す。）

（譜例—15）



minor7th.とmajor7th.を学んだところで、それらを使うことによって雰囲気異なる楽曲になることを実践。**B**ではメロディーを変奏する様に示唆はしたが学生が自分で作ることができた。Endingもminor7th.とmajor7th.を使って工夫していた。

(2) 3人5手の連弾 グループB

メロディーとベースラインと和音奏の3パートに分けたアンサンブル。

Intro.は「C-Am-Dm-G7」の循環コードを2回繰り返すシンプルなもの。汎用性のあるコード進行をコードネームから覚える。いろいろな曲ですぐに前奏がつけられることを学ぶ。

A、**B**は原曲のイメージ通り楽しく弾んで演奏。

(譜例—16)

Cの部分は8分の6拍子に変えて滑らかで優しい曲想にする。

(譜例—17)

Dからは2分の2拍子に戻って陽気に終わる。メロディーパートの学生は自分でメロディーのリズムを工夫することができた。途中で拍子が変わってもテンポをキープしたり、ベースと後打ちのリズムの和音のパートがタイミングを合わせて演奏したりと、アンサンブルならではの難しさと楽しさの醍醐味を感じられる演奏である。

(3)4手連弾 グループC

Intro.は前述の「C-Am-Dm-G7」の循環コード。8ビートのリズム合わせる。そのまま全曲8ビートのスタイルで演奏するつもりであったが、メロディーとの合わせ方が難しくテーマ**A**からは原曲のイメージの2拍子となった。

(譜例—18)

Bは primo(第1パート)がメロディーとともに高音で鈴のような音を入れる。また secondo(第2パート)の2、4小節目でフィルイン⁷を入れて華やかにする。

(譜例—19)

Endingはテーマの最後の2小節のフレーズを3回繰り返して使う。このとき前奏で使った8ビートにもどった。音楽としてスタイルの一貫性も重要ではあるがこの学生たちが「弾いてみたいスタイル」は「8ビートのリズムによる演奏」であったので前奏・後奏に取り入れられてよかったと考える。実際、ビートのチェンジ

があるにもかかわらずとてもテンポのよい軽やかな演奏であった。

(譜例—20)

(4) 4手連弾 グループD

メロディーは原曲通り弾んだリズムのまま **Secondo** はコードを分散和音でゆっくりの4拍子で奏する。

(譜例—21)

分数コードを学習したので **B** から **C** のブリッジの部分 (譜例—22**B**7,8) で実践。「C—C/B—C/A—C/G」

C で **secondo** は分散和音の形を変える。ここでも分数コードを実践。「C7—F/C—C7—F/C—D7—G/D—D7—G」(譜例—22**C**)

C の8小節目は **primo** がアルペジオを使って華やかなブリッジにする。新たに **Gaug** のコードを使う。(譜例—22**C** 8)

(譜例—22)

(5) 4手連弾 グループE

Intro. は鈴の音を模した **primo** の音で始まる。**A** はメロディーも伴奏も弾んだ形で明るく楽しい雰囲気演奏。

(譜例—23)

□C メロディーと伴奏パートを入れ替える。低音域でのメロディー奏は音楽の幅が広がる。また連弾の場合、奏者にとってもメロディーと伴奏の両パートを経験できる。

(譜例—24)



□Cから□Dへはグリッサンド奏法(この場合白鍵の鍵盤を滑らせて奏し、低音部—secondo から高音部—primo へと受け渡す)を使う。

シンプルながら雰囲気似合った可愛い音使いで(譜例—25□D) 8曲は終わる。

(譜例—25)



(6) 4手連弾 グループF

2コーラスのアレンジでの演奏。このペアは技量もあり primo はメロディー変奏もでき、Secondo は8小節ごとに色々な伴奏変奏を考えることができた。そこで音楽的な構成のまとまりを指導してフェイクや伴奏形を整理。2コーラス(□A - □B - □C - □D - □A - □B - □C - □D) のアレンジでの演奏にまとめた。1コーラス目□Aは原曲のイメージ通りの弾む2拍子。単音によるメロディライン。

(譜例—26)



続く□Bではメロディーをフェイクやグリッサンドで工夫。

(譜例—27)



2コーラス目の□A (□2-A) ではジャズのアドリブの音使いやリズムを取り入れる。

(譜例—28)



2コーラス目の□B (□2-B) は secondo がフェイクしながらのメロディー奏、primo が伴奏。

(譜例—29)



2 コーラス目の \boxed{C} ($\boxed{2-C}$) は *secondo* が取り入れたかった伴奏形で演奏。

(譜例—30)



$\boxed{\text{Ending}}$ は $\boxed{D5}$ ($\boxed{2-D-5}$)、6小節目フレーズを3回繰り返してグリッサンドをつけて閉じる。2回目の繰り返しでは ($\boxed{2-D-7}$) 短3度上げた $E\flat$ に一時転調。お洒落な雰囲気が増す。

(譜例—31)



(7) 4手連弾 グループ G

発表の前週欠席のため当日ペアを組み練習発表となった。技量のあるペアで、個性のあるアレンジはできなかったが3-8⑤『わらの中の七面鳥』の連弾曲アレンジの経験を活かして演奏発表をすることができた。

5. 考察

3-9 コードネーム付きメロディー譜 (2)
①『サンタが町にやって来る』の練習期間を記す。

11月7,14,21日 コード奏練習題材(指導者のメロディー奏に合わせてベース音を弾く、コードでの両手伴奏、メロディー奏等)として授業で学習。

12月12日 発表形態としてソロ、連弾、3人連弾としてチームを組み方向性を決めながら練習。指導。

12月19日 指導の後、発表。

5月からの積み重ねがあつて2回の授業で発表できる演奏が仕上がった。とりわけ(5)グループCの連弾のペアはピアノ初心者である。連弾用の楽譜を読譜によって練習したのではこの短期間での演奏実現には至らない。楽譜からは最小限の情報(メロディーとコード)を読み取り、あとは自分で考えたり覚えたりしたことを自分の技量に合わせて再現する奏法であつたので短期間に一曲仕上げることができた。音楽の外郭を早く捉えすぐに流れのある音楽として再現できることが演奏意欲に繋がる。楽しく繰り返し練習することで技能が磨かれる。他の学生たちの技量も様々であるが自分が音を操りながら自分の奏でたい音楽を再現する楽しさを実感できていた。さらに同じ楽譜を見ながらそれぞれの個性に合わせた全く別の曲想の音楽を体験した。学生に限らず、また、コード奏法に限らず、身近な仲間の演奏を聴きあうことはよい影響を与え合う。特にコード奏法では仲間の使う手法を自分も取り入れて身に付けていく。指

導者からの助言を取り入れると自分たちの演奏がグレードアップしていくことが実感できる。指導者には的確な助言が求められる。音使いやリズムや和音等その学生が即応できる範囲での有効な助言により演奏力を向上させる。

奏者も聴者も楽しい演奏発表会を経験できコード奏の活用を学んだわけであるが、この学生たちも、この後更に継続して勉強してコード奏の技術が定着して応用力が付くと、ようやく「活用できる」と実感するのであろうと考える。

本稿が対象授業とした「子ども学ゼミA」はピアノの技量は問わないが音楽を勉強する意欲の高い学生が通年で受講している。それ故、発表までの地味な積み重ねの部分も粘り強く取り組むことができた。コード奏の利便性をいかしてコード奏によるピアノ演奏を考えたとき実践していくには今回取り組んだ毎回の授業内課題のドリルのように時間と練習を要するプロセスが必要と考える。プロセス継続のモチベーションのためにもコード付きメロディー楽譜から様々に思い描いた音楽を再現する楽しさを実感することが何より求められる。楽しさを知れば他の複雑なコードネームにも屈せず対応できていく。

6. 今後の課題

本稿では論じていないが毎回のドリル計11種類の習熟の推移を分析して、より効率的な技能定着を引き続き考えていきたい。また、コード奏の技能が身に付くと、早く楽しくピアノが弾けるということを実感させたいが故に各曲にかける時間が少なく、学生が練習してきた楽曲をより良い内容に仕上げていく過程に十分な時間を取ることができなかつた。指導の時間を充実して取れるように授業計画を改善していきたい。

7. 注釈・引用文献

- ¹ 大譜表 ト音譜表の下にヘ音譜表を置き、両方を縦線と大かっこで結んだ譜表をいう。この譜表はひらがなのヘ音から2点ト音までの広い音域を記すことができるので（上下に加線を書けばもっと広くなる）ピアノ、オルガン、ハーブのような楽器や混声合唱曲などに使用される。
- ² 本学では、ピアノ（鍵盤）レッスンの経験がなく本学で初歩から学ぶ学生を初心者、レッスン等での学習経験がありピアノ教材『ブルグミュラー25の練習曲』学習程度を初級者、『ソナチネアルバム』学習程度を中級者、『ソナタアルバム』学習程度を上級者とする。
- ³ 分数コード fractional chord コード転回形やアッパー・ストラクチャー・トライアドを指示する場合のコードネームの処理。転回形の場合は分母にベース音、分子にコード・ネームを記す。
- ⁴ フェイク fake 本来は「ごまかす」という意味の言葉で、メロディーをそのまま演奏するのではなく、変化させた形で演奏することを指す。
- ⁵ major 7th.の表記方法は色々あるが〔C 7 - 1〕〔C 7 - 2〕ではトライアドの右側に△7を付記して示す。
- ⁶ (譜例13)～(譜例31)は当日の学生の演奏音源から本稿用に採譜したもの。学生は(譜例19)の楽譜で演奏。アレンジや演奏については助言、指導の必要なものもあるが本稿では修正を加えていない。
- ⁷ フィルイン fill-in メロディーの空白部分を埋めるための即興演奏

引用文献

- ² 新音楽辞典 楽語 1977年 音楽の友社発行
編集兼発行者 浅香淳
- ^{3, 4, 5} 実用音楽用語辞典 2004年 ドレミ楽譜出版発行 編集 石川祐弘 発行 安永憲一郎

ピアスーパーバイザーからのコメント

本論文は、保育現場におけるピアノの活用という側面から従来の練習法を見直し、初心者から上級者までレベルに応じて楽しみながら身に付く「コードネームを用いた演奏法」を提案するものです。保育者養成校におけるピアノの授業では楽譜通りに演奏することを目標とした練習方法が一般的ですが、井本氏はコード奏の汎用性や柔軟性に着目し、保育現場でこそ活かされる演奏法としてその効果的な習得法を開発し、実践されています。

本論文が提案するコード奏やその練習法は保育者のみならず、演奏技量に拘らずピアノをより楽しみながら弾きたい人や、自分なりにアレンジしたり伴奏したりしたい人にも活用できる方法なので、広く普及することを願っています。

(担当：小林伸雄)